

現代の文学 = 8

川端康成集



伊豆の踊子

雪国

千羽鶴

山の音

虹いくたび

眠れる美女

河出書房新社

現代の文学 8 川端康成集

康成

© 1963

責任編集

川端康成 丹羽文雄

円地文子 井上靖

松本清張 三島由紀夫

昭和38年 7月15日 初版印刷
昭和38年 7月20日 初版発行

定価 390円

著者 川端康成
発行者 河出孝雄
印刷者 高橋武夫
装幀 原弘

印刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
面貼・神崎製紙（ミラーコート）
同納入・東邦紙業株式会社
クロス・日本クロス工業株式会社
同納入・株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の八

電話東京 (291) 3721~7
振替口座 東京 10802

製本・美行製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

伊豆の踊子	三
雪 国	二三
千羽鶴	一〇五
山の音	一八九
虹いくたび	二六三
眠れる美女	四九五

解 年

説 譜

伊

藤

整

五六三

五五七

挿画 東山魁夷

川
端
康
成
集

伊豆の踊子



一

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠^{あまぎとうげ}に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。

私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白^{こんひびく}の着物に袴をはき、学生カバンを肩にかけていた。一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。修善寺温泉に一夜泊り、湯ヶ島温泉に二夜泊り、そして朴^{はろば}齒の高下駄で天城を登って来たのだった。重なり合った山々や原生林や深い溪谷の秋に見惚れながらも、私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでいるのだった。そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。折れ曲った急な坂道を駆け登った。ようやく峠の北口の茶屋に辿りついてほっとすると同時に、私はその入口で立ちすくんでしまった。余りに期待がみごとに的中したからである。そこに旅芸人の一行が休んでいたのだ。

突っ立っている私を見た踊子が直ぐに自分の座蒲団を外して、裏返しに傍へ置いた。

「ええ……。」とだけ言つて、私はその上に腰を下した。坂道を走った息切れと驚きとで、「ありがとう。」という

言葉が咽にひっかかって出なかったのだ。

踊子と真近に向い合つたので、私はあわてて袂から煙草を取り出した。踊子がまた連れの女の前の煙草盆を引き寄せて私に近くしてくれた。やっぱり私は黙っていた。

踊子は十七くらいに見えた。私には分らない古風の不思議な形に大きく髪を結っていた。それが卵形の凛々しい顔を非常に小さく見せながらも、美しく調和していた。髪を豊かに誇張して描いた、稗史的な娘の絵姿のような感じだった。踊子の連れは四十代の女が一人、若い女が二人、ほかに長岡温泉の宿屋の印半纏^{しるしはんけん}を着た二十五六の男がいた。

私はそれまでにこの踊子たちを二度見ているのだった。最初は私が湯ヶ島へ来る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出会った。その時は若い女が三人だったが、踊子は太鼓を提げていた。私は振り返り振り返り眺めて、旅情が自分の身についたと思った。それから、湯ヶ島の二日目の夜、宿屋へ流して来た。踊子が玄關の板敷で踊るのを、私は梯子段の中途に腰を下して一心に見ていた。——あの日が修善寺で今夜が湯ヶ島なら、明日は天城を南に越えて湯ヶ野温泉へ行くのだろう。天城七里の山道できつと追いつけるだろう。そう空想して道を急いで来たのだったが、雨宿りの茶屋でびったり落ち

合ったものだから、私はどきまぎしてしまつたのだ。

間もなく、茶店の婆さんが私を別の部屋へ案内してくれた。平常用はないらしく戸障子がなかった。下を覗くと美しい谷が目の届かない程深かった。私は肌に粟粒を拵え、かちかちと歯を鳴らして身顫いした。茶を入れに來た婆さんに、寒いと言うと、

「おや、旦那様お濡れになつてるじゃございませんか。

こちらで暫くおあたりなさいまし、さあ、お召物をお乾かしなさいまし。」と、手を取るようにして、自分たちの居間へ誘ってくれた。

その部屋は炉が切つてあつて、障子を明けると強い火気が流れて來た。私は敷居際に立つて躊躇した。水死人のように全身蒼ぶくれの爺さんが炉端にあぐらをかいてゐるのだ。瞳まで黄色く腐つたような眼を物憂げに私の方へ向けた。身の周りに古手紙や紙袋の山を築いて、その紙屑のなかに埋もれていて、言つてもよかつた。到底生物と思えない山の怪奇を眺めたまま、私は棒立ちになつてゐた。

「こんなお恥かしい姿をお見せいたしました……。でも、うちのじじいでございますから御心配なさいますな。お見苦しくても、動けないのでございますから、このままで堪忍してやつて下さいまし。」

そう断わつてから、婆さんが話したところによると、

爺さんは長年中風を患つて、全身が不随になつてしまつてゐるのだそうだ。紙の山は、諸国から中風の養生を教へて來た手紙や、諸国から取り寄せた中風の薬の袋なのである。爺さんは峠を越える旅人から聞いたり、新聞の広告を見たりすると、その一つをも洩らさずに、全国から中風の療法を聞き、売薬を求めたのだそうだ。そして、それらの手紙や紙袋を一つも捨てずに身の周りに置いて眺めながら暮して來たのだそうだ。長年の間にそれが古ぼけた反古の山を築いたのだそうだ。

私は婆さんに答える言葉もなく、囲炉裏の上にうつむいてゐた。山を越える自動車が家を揺すぶつた。秋でもこんなに寒い、そして間もなく雪に染まる峠を、なぜこの爺さんは下りないのだろうと考へてゐた。私の着物から湯気が立つて、頭が痛む程火が強かつた。婆さんは店に出て旅芸人の女と話してゐた。

「そうかねえ。この前連れていた子がもうこんなになつたのかい。いい娘になつて、お前さんも結構だよ。こんなに綺麗になつたのかねえ。女の子は早いもんだよ。」

小一時間経つと、旅芸人たちが出立つらしい物音が聞えて來た。私も落着いてゐる場合ではないのだが、胸騒ぎするばかりで立ち上る勇気が出なかつた。旅馴れたと言つても女の足だから、十町や二十町後れたって一走りに追いつけると思ひながら、炉の傍でいらいらしてゐ

た。しかし踊子たちが傍にいなくなると、却って私の空想は解き放たれたように生き生きと踊り始めた。彼等を送り出して来た婆さんに聞いた。

「あの芸人は今夜どこで泊るんでしょう。」

「あんな者、どこで泊るやら分るものでございますか、旦那様。お客があればあり次第、どこにだって泊るんでございますよ。今夜の宿のあてなんぞございますものか。」

甚だしい軽蔑を含んだ婆さんの言葉が、それならば、踊子を今夜は私の部屋に泊らせるのだ、と思った程私を煽り立てた。

雨脚が細くなつて、峰が明るんで来た。もう十分も待てば綺麗に晴れ上ると、しきりに引き止められたけれども、じつと坐っていられたかった。

「お爺さん、お大事になさいよ。寒くなりますからね。」と、私は心から言つて立ち上つた。爺さんは黄色い眼を重そうに動かして微かにうなずいた。

「旦那さま、旦那さま。」と叫びながら婆さんが追つかけて来た。

「こんなに戴いては勿体のうございます。申訳ございません。」

そして私のカバンを抱きかかえて渡そうとせずに、幾ら断わつてもその辺まで送ると言つて承知しなかった。

一町ばかりもちよこちよこつて来て、同じことを繰り返していた。

「勿体のうございます。お粗末いたしました。お顔をよく覚えて居ります。今度お通りの時にお礼をいたします。この次もきつとお立ち寄り下さいまし。お忘れはいたしません。」

私は五十銭銀貨を一枚置いただけだったので、痛く驚いて涙がこぼれそうに感じているのだったが、踊子に早く追いつきたいものだから、婆さんのよろよろした足取りが迷惑でもあつた。とうとう峠のトンネルまで来てしまった。

「どうも有難う。お爺さんが一人だから帰つて上げて下さい。」と私が言うと、婆さんはやつとのことカバンを離した。

暗いトンネルに入ると、冷たい雪がぱたぱた落ちていた。南伊豆への出口が前方に小さく明るんでいた。

二

トンネルの出口から白塗りの柵に片側を縫われた峠道が稲妻のように流れていた。この模型のような展望の裾の方に芸人達の姿が見えた。六町と行かないうちに私は彼等の一行に追いついた。しかし急に歩調を緩めることも出来ないの、私は冷淡な風に女達を追いついてしま

った。十間程先きに一人歩いてゐた男が私を見ると立ち止った。

「お足が早いですね。——いい塩梅に晴れました。」

私はほっとして男と並んで歩き始めた。男は次ぎ次ぎにいろんなことを私に聞いた。二人が話し出したのを見て、うしろから女たちがばたばた走り寄つて来た。

男は大きい柳行李を背負つてゐた。四十女は小犬を抱いてゐた。上の娘が風呂敷包、中の娘が柳行李、それぞれ大きい荷物を持っていた。踊子は太鼓とその杵を負うてゐた。四十女もぼつぼつ私に話しかけた。

「高等学校の学生さんよ。」と、上の娘が踊子に囁いた。私が振り返ると笑ひながら言つた。

「そうでしょう。それくらいのこと知っています。島へ学生さんが来ますもの。」

一行は大島の波浮の港の人達だつた。春に島を出てから旅を続けているのだが、寒くなるし、冬の用意はして来ないので、下田に十日程いて伊東温泉から島へ帰るのだと言つた。大島と聞くと私は一層詩を感じて、また踊子の美しい髪を眺めた。大島のことをいろいろ訊ねた。

「学生さんが沢山泳ぎに来るね。」と、踊子が連れの女に言つた。

「夏でしょう。」と、私が振り向くと、踊子はどぎまぎして、

「冬でも……。」と、小声で答えたように思われた。

「冬でも？」

踊子はやはり連れの女を見て笑つた。

「冬でも泳げるんですか。」と、私がもう一度言うのと、踊子は赤くなつて、非常に真面目な顔をしながら軽くうなずいた。

「馬鹿だ。この子は。」と、四十女が笑つた。

湯ヶ野までは河津川の溪谷に沿うて三里余りの下りだつた。峠を越えてからは、山や空の色までが南国らしく感じられた。私と男とは絶えず話し続けて、すっかり親しくなつた。萩乗や梨本などの小さい村里を過ぎて、湯ヶ野の蘆屋根が麓に見えるようになった頃、私は下田まで一緒に旅をしたいと思ひ切つて言つた。彼は大笑喜んだ。

湯ヶ野の木賃宿の前で四十女が、ではお別れ、という顔をした時に、彼は言つてくれた。

「この方はお連れになりたいとおっしゃるんだよ。」

「それは、それは。旅は道連れ、世は情。私たちのようになつまらない者でも、御退屈しのぎにはなりますよ。まあ上つてお休みなさいまし。」と無造作に答えた。娘達は一時に私を見たが、至極なんでもないという顔で黙つて、少し羞かしそうに私を眺めていた。

皆と一緒に宿屋の二階へ上つて荷物を下した。畳や襖

も古びて汚なかった。踊子が下から茶を運んで来た。私の前に坐ると、真紅になりながら手をぶるぶる顫わせるので茶碗が茶托から落ちかかり、落すまいと畳に置く拍子に茶をこぼしてしまった。余りにひどいはいにかみようなので、私はあっけにとられた。

「まあ！ 厭らしい。この子は色気ついたんだよ。あれあれ……。」と、四十女が呆れ果てたという風に眉をひそめて手拭を投げた。踊子はそれを拾って、窮屈そうに畳を拭いた。

この意外な言葉で、私はふと自分を省みた。峠の婆さんに煽り立てられた空想がぼきんと折れるのを感じた。

そのうちに突然四十女が、

「書生さんの紺飛白はほんとにいいねえ。」と言って、しげしげ私を眺めた。

「この方の飛白は民次と同じ柄だね。ね、そうだね。同じ柄じゃないかね。」

傍の女に幾度も駄目を押してから私に言った。

「国に学校行きの子供を残してあるんですが、その子を今思い出しましてね。その子の飛白と同じなんですもの。この節は紺飛白もお高くてほんとに困ってしまふ。」

「どの学校です。」

「尋常五年なんです。」

「へえ、尋常五年とはどうも……。」

「甲府の学校へ行ってるんでございますよ。長く大島に居りますけれど、国は甲斐の甲府でございましてね。」

一時間程休んでから、男が私を別の温泉宿へ案内してくれた。それまでは私も芸人達と同じ木賃宿に泊ることとはかり思っていたのだった。私達は街道から石ころ路や石段を、一町ばかり下りて、小川のほとりにある共同湯の横の橋を渡った。橋の向うは温泉宿の庭だった。

その内湯につかっていると、後から男がはいって来た。自分が二十四になることや、女房が二度とも流産と早産とで子供を死なせたことなどを話した。彼は長岡温泉の印半纏を着ているので、長岡の人間だと私は思っていたのだった。また顔付も話振りも相当知識的なところから、物好きか芸人の娘に惚れたかで、荷物を持ってやりながらついて来ているのだと想像していた。

湯から上ると私は直ぐに昼飯を食べた。湯ヶ島を朝の八時に出たのだったが、その時はまだ三時前だった。

男が帰りがけに、庭から私を見上げて挨拶をした。

「これで柿でもおあがりなさい。二階から失礼。」と言って、私は金包みを投げた。男は断わって行き過ぎようとしたが、庭に紙包みが落ちたままなので、引き返してそれを拾うと、

「こんなことをなさっちゃいけません。」と抛り上げた。それが薬屋根の上に落ちた。私がかう一度投げると、男

は持つて帰った。

夕暮からひどい雨になった。山々の姿が遠近を失つて白く染まり、前の小川が見る見る黄色く濁つて音を高めた。こんな雨では踊子達が流して来ることもあるまいと思ひながら、私はじつと坐つていられないので二度も三度も湯にはいつてみたりしていた。部屋は薄暗かった。隣室との間の襖を四角く切り抜いたところに鴨居から電燈が下つていて、一つの明りが二室兼用になっているのだった。

ととんとんとん、激しい雨の音の遠くに太鼓の響きが微かに生れた。私は掻き破るように雨戸を明けて体を乗り出した。太鼓の音が近づいて来るようだ。雨風が私の頭を叩いた。私は眼を閉じて耳を澄まし乍ら、太鼓がどこをどう歩いてここへ来るかを知らうとした。間もなく三味線の音が聞えた。女の長い叫び声が聞えた。賑かな笑い声が聞えた。そして芸人達は木賃宿と向い合つた料理屋のお座敷に呼ばれているのだと分つた。二三人の女の声と三四人の男の声とが聞き分けられた。そこがすめばこちらへ流して来るのだらうと待つていた。しかしその酒宴は陽気を越えて馬鹿騒ぎになつて行くらしい。女の金切声が時々稲妻のように闇夜に鋭く通つた。私は神経を尖らせて、いつまでも戸を明けたままじつと坐つていた。太鼓の音が聞える度に胸がほうと明るんだ。

「ああ、踊子はまだ宴席に坐つていたのだ。坐つて太鼓を打っているのだ。」

太鼓が止むとたまらなかつた。雨の音の底に私は沈み込んでしまつた。

やがて、皆が追っかけつてをしているのか、踊り廻つてゐるのか、乱れた足音が暫く続いた。そして、びたと静まり返つてしまつた。私は眼を光らせた。この静けさが何であるかを闇を通して見ようとした。踊子の今夜が汚れるのであらうかと悩ましかつた。

雨戸を閉じて床にはいつても胸が苦しかつた。また湯にはいつた。湯を荒々しく掻き廻した。雨が上つて、月が出た。雨に洗われた秋の夜が互え互えと明るんだ。跣で湯殿を抜け出して行つたつて、どうとも出来ないのだと思つた。二時を過ぎていた。

三

翌朝の九時過ぎに、もう男が私の宿に訪ねて来た。起きたばかりの私は彼を誘つて湯に行つた。美しく晴れ渡つた南伊豆の小春日和で、水かさの増した小川が湯殿の下に暖かく日を受けていた。自分にも昨夜の悩ましさが夢のように感じられるのだったが、私は男に言つてみた。

「昨夜は大分遅くまで賑かでしたね。」

「なあに。聞えましたか。」

「聞えましたとも。」

「この土地の人なんです。土地の人は馬鹿騒ぎをするばかりで、どうも面白くありません。」

彼が余りに何げない風なので、私は黙ってしまった。

「向うのお湯にあいつらが来ています。――ほれ、こちらを見つけたと見えて笑っていやがる。」

彼に指さされて、私は川向うの共同湯の方を見た。湯気の中に七八人の裸体がぼんやり浮んでいた。

仄暗い湯殿の奥から、突然裸の女が走り出して来たかと思うと、脱衣場の突鼻に川岸へ飛び下りそうな恰好で立ち、両手を一ぱいに伸して何か叫んでいる。手拭もない真裸だ。それが踊子だった。若桐のように足のよく伸びた白い裸身を眺めて、私は心に清水を感じ、ほうっと深い息を吐いてから、ことごとく笑った。子供なんだ。私達を見つけた喜びで真裸のまま日の光の中に飛び出し、爪先きで背一ぱいに伸び上る程に子供なんだ。私は朗らかな喜びでことごとく笑い続けた。頭が拭われたように澄んで来た。微笑がいつまでもとまらなかった。

踊子の髪が豊か過ぎるので、十七八に見えていたのだ。その上娘盛りのように装わせてあるので、私はとてもない思い違いをしていたのだ。

男と一緒に私の部屋に帰っていると、間もなく上の娘

が宿の庭へ来て菊畑を見ていた。踊子が橋を半分程渡っていた。四十女が共同湯を出て二人の方を見た。踊子はきゅっと肩をつぼめながら、叱られるから帰ります、という風に笑って見せて急ぎ足に引き返した。四十女が橋まで来て声を掛けた。

「お遊びにいらっしゃいまし。」

「お遊びにいらっしゃいまし。」

上の娘も同じことを言って、女達は帰って行った。男はとうとう夕方まで坐り込んでいた。

夜、紙類を卸して廻る行商人と碁を打っていると、宿の庭に突然太鼓の音が聞えた。私は立ち上ろうとした。

「流しが来ました。」

「ううん、つまらない、あんなもの。さ、さ、あなたの手ですよ。私ここへ打ちました。」と、碁盤を突つきながら紙屋は勝負に夢中だった。私はそわそわしているうちに芸人達はもう帰り路らしく、男が庭から、

「今晚は。」と声を掛けた。

私は廊下に出て手招きした。芸人達は庭で一寸囁き合ってから玄関へ廻った。男の後から娘が三人順々に、

「今晚は。」と、廊下に手を突いて芸者のようにお辞儀をした。碁盤の上では急に私の色が見え出した。

「これじゃ仕方がありません。投げですよ。」

「そんなことがあるんですか。私の方が悪いでしょ」

う。どっちにしても細かいです。」

紙屋は芸人の方を見向きもせず、碁盤の目を一つ一つ数えてから、増々注意深く打って行った。女達は太鼓や三味線を部屋の際に片づけると、将棋盤の上で五目並べを始めた。そのうちに私は勝っていた碁を負けてしまったのだが、紙屋は、

「いかがですもう一石、もう一石願いましょう。」と、しつこくせがんだ。しかし私が意味もなく笑っているばかりなので紙屋はあきらめて立ち上った。

娘たちが碁盤の近くへ出て来た。

「今夜はまだこれからどこかへ廻るんですか。」

「廻るんですが。」と、男は娘達の方を見た。

「どうしよう。今夜はもう止しにして遊ばせていたんだけど。」

「嬉しいね。嬉しいね。」

「叱られやしませんか。」

「なあに、それに歩いたってどうせお客がないんです。」
そして五目並べなどをしながら、十二時過ぎまで遊んで行った。

踊子が帰った後は、とても眠れそうもなく頭が互え互えしているので、私は廊下に出て呼んでみた。

「紙屋さん、紙屋さん。」

「よう……。」と、六十近い爺さんが部屋から飛び出し、

勇み立って言った。

「今晚は徹夜ですぞ。打ち明すんですぞ。」

私もまた非常に好戦的な気持だった。

四

その次の朝八時が湯ヶ野出立の約束だった。私は共同湯の横で買った烏打帽をかぶり、高等学校の制帽をカバンの奥に押し込んでしまつて、街道沿いの木賃宿へ行った。二階の戸障子がすっかり明け放たれているので、なんの気なしに上って行くと、芸人達はまだ床の中にいるのだった。私は面喰つて廊下に突っ立っていた。

私の足もとの寝床で、踊子が真赤になりながら両の掌ではたと顔を抑えてしまった。彼女は中の娘と一つの床に寝ていた。昨夜の濃い化粧が残っていた。唇と眦まろじりの紅が少しにじんていた。この情緒的な寝姿が私の胸を染めた。彼女は眩しそうにくるりと寝返りして、掌で顔を隠したまま蒲団を迂り出ると、廊下に坐り、

「昨晚はありがとうございました。」と、綺麗なお辞儀をして、立ったままの私をまごつかせた。

男は上の娘と同じ床に寝ていた。それを見るまで私は、二人が夫婦であることをちっとも知らなかったのだ。

「大変すみませんですよ。今日立つつもりでしたけれ